

Stefan Tanaka報告へのコメント

藤田高夫*

Stefan Tanaka氏の報告「時間と東洋のパラドクス」は、過去を研究する基礎としての「時・時間」へのきわめて思索的省察を踏まえて、近代日本の「東洋」概念と東洋史の構築を新たな角度から論じたものである。

周知のとおり、Tanaka氏は、大著“*Japan's Orient: Rendering Past into History*” (California, 1993)において、20世紀初期の日本における東洋史学の形成をめぐる重要な諸問題を論じている。本報告も、その成果を踏まえながら、「時と場所を切り取り、作り出す」行為としての歴史の言説の本質に深く踏み込んだものであった。

報告では、井上哲次郎・白鳥庫吉・津田左右吉という三人の東洋学者が主に議論の対象となった。近代が単一のゴールに向かうレースならば、諸地域の歴史はその同一線上の完成度の相違として現れることになる。井上哲次郎は、19世紀末に「東洋史学」の創設をいち早く提唱したが、そこには日本を「オリент」のなかに組み込んでしまう西洋的認識に対する抵抗が込められていた。その意味で「東洋史学」の創設は、日本を他の東洋から切り離す営為でもあった。白鳥庫吉は、「東と西」の相対性を回避して、別の歴史展開のダイナミズムを構築しようとした。そこでは、「国」が独自の過去、思考法、行動法を持つユニットとしてtimelessな存在となる。「西洋とオリент」というパラダイムと同様に東洋史学も一つの絶対的な枠組みを使用する。「東洋」という普遍性を突き詰めていけば、その中での日本は、中国や韓国の過去の歴史のなかに閉じこめられることになる。東洋史学にはかかる限界性が内包されていた。

本報告の白眉は、こうした文脈のなかで津田左右吉を位置づけたところであろう。津田の試みた「東洋の脱構築」は、固定化された過去としての東洋、中国やインドとの関係における日本の歴史からの決別であった。津田が、日本はオキシデントであり、オキシデントとは、文化を進歩させる精神を日本に与えた近代文化であると論じたことは、「東洋史」を近代的「時間」概念のなかで理解することの限界を知っていたことを物語っている。

本シンポジウムのセッション2は、東アジアの「東洋」認識をテーマとしている。本報告は、このテーマを正面から論じた有益な業績であった。同時に、我々に大きな宿題を残したのもでもある。今日、「東アジア」「東洋」「オリент」という枠組みを用いて議論することの問題

* 関西大学文学部教授 関西大学ICIS事業推進担当者

性は、多方面で指摘されている。それぞれの枠組みが、対象との親和性を担保されながらうまく機能しているうちは、その問題は顕在化しない。しかし、対象となる現象を歴史的文脈のなかに置こうとすると、この問題はにわかに重要性を帯びてくる。

近代学術の一つとしての東洋史学は、「日本」を直接の対象として含めてはいないが、にもかかわらずその形成と展開には、いわば陰の主演としての日本の位置づけが見え隠れする。また、東洋という一つの「歴史空間」は、現実に存在する、或いは存在した国家・政治集団が構成の単位として想定されてきた。近代日本の東洋史学は、その空間設定の蓋然性を自明としてきた部分があることは否めない。個々の構成単位の相互関係の存在が、空間設定の有効性を保証していたのである。そして東洋史学という枠組みは、個別の国家の歴史の単なる集積を越えたところで、その正当性を主張することが可能なはずであった。その意味で、「一国史」の絶対性を強調することは、東洋史学の本来の方向には逆行するものであったろう。しかし、本報告で浮かび上がったのは、津田左右吉の「新しさ」である。東洋という普遍よりも、日本という個別に本質的部分を見いだすことに妥当性が見られるならば、学術史としての東洋史学は、根本的な再検討が必要となるだろう。

我々のG-COEプログラムは、「一国文化史」的視野からの脱却を一つの目標として掲げている。しかし、近代という特定の状況において近代学術の形成を考える上では、「一国史」的枠組みの背景を、現代的問題意識から単に克服すべきものとして看過するのではなく、今一度深く掘り下げてみる必要が生じている。本報告は、そのための重要な示唆を与えてくれるものであろう。